

追慕の影像

—故長沢信寿先生—

東 光 寛 英

*Ὅτι μὲν ὑμεῖς, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πεπόνθατε ὑπὸ τῶν ἐμῶν
κατηγόρων, οὐκ οἶδα*.....

W. Schadewaldt の朗読のレコードもあるが、長沢先生の御声はもう二度と聞くことができない。

〔その生涯〕

1897（2月24日）、新潟県柏崎市小町に生まれる。1922、仏教大学（現竜谷大学）卒業。1926、京都帝国大学文学部哲学科選科終了。1929—41、立命館大学予科教授。1940—48、竜谷大学文学部教授、宗教学講座担任、京都大学文学部及び法学部講師を併任。1948、九州大学文学部教授、哲学・哲学史第二講座担任。1958、文学博士。1960、九州大学文学部を定年退官。1960、福岡第一薬科大学教授、1967—72、帝塚山大学教授。

※1950—69、大阪大学文学部講師、1961、学士院賞受賞。1967、叙勲、モンテリオールの国際中世哲学会に出席。

1972(11月12日)、歿す。

先生は、三階節の米山を背にし、前面には濤逆かまく荒海の日本海や佐渡の見ゆる柏崎市に生まれる。当市は、嘗っては、国学者平田篤胤の高弟、^{イクネクニホ}生田国秀（萬）^{モロゾ}の居住の地である。

少年時代（14才頃）に御尊父を喪われ、先生の御尊父に対する欽慕の情は年令とともに深まったようである。御尊母は突然1935年2月に御逝去な

され、そのときの先生の悲嘆は大きく執筆中の著作『プラトン』の筆を一時投げやるの己むなきに至ったほどであった。仏教大学（現竜谷大学）への入学は仏教研究のため梵語を勉強するつもりであったが、卒業のときは宗教学専攻であった。竜谷大学在任中先生は、宗教史、アウグスティヌスの特殊講義、ヘーゲルの『精神現象学』の講読、ラテン語文法などの講義を行なった。その後、九州大学には、単独赴任なされ、結局、退官まで、大学の研究室で起居寝食をなさった。御長男は幼少の頃に亡くなられたようであるが、1949年11月に、旧制第三高等学校二年在学中の御次男を交通事故で喪われた。そのときの先生の御悲嘆はこの上もなかった。1951年頃の九州大学の講義は、プラトンの『アポロギア』、アリストテレスの『デ・アニマ』、アウグスティヌスの『告白』の時間論の巻であり、この巻の講読には、当時の教授、田辺重三先生、山本清幸先生も出席していた。西谷啓治先生のすすめで、佐賀大教授の清水正昭氏が大学院に、安藤孝行先生のすすめで、金沢工業大学助教授の橋本隼男氏が学部編入して来た。また当時の哲学科院生や学生としては、福岡大学教授久保守氏、山口大学助教授武宮諦氏、東京純心短期大学教授の津崎幸子氏、神戸海星女子学院大学助教授本田正昭氏などである。なお、東北大学教授、楠正弘氏と筆者は竜谷大学在任中の教え子である。1958年11月、「アウグスティヌス哲学の研究」で学位授与され、1960年3月にこれが刊行され、1961年5月にこの著書が学士院受賞となった。九州大学退官後の1962年6月に入院なさっているが、すでに、1958年11月、第7回中世哲学大会の開催の前日に、胃病で、急に京都府立医大病院に入院なさっている。1967年8月27日～9月2日に行われたモンテリオールの国際中世哲学会に、日本の中世哲学会の代表として学術会議より派遣せられて出席なさった。この学会の様子が『中世思想研究』第10号で報告されている。そのとき、先生が撮られた、ジルソンの研究室のあるトロント大学の The Pontifical Institute の写真が、筆者に恵送された。1972年8月24日に京都大学附属病院

に入院なされ、11月6日に筆者は御見舞し拝眉を賜ったが、11月12日午前3時半、肝臓疾患のため、当病院で永眠なされた。

先生は、1958～59年に西日本哲学会委員長をなされ、嘗っては日本宗教学会役員をなされ、日本西洋古典学会委員も長い間なされ、1951年3月、中世哲学会設立準備会で、当学会の発起人となり、それ以来、御逝去に至るまで、中世哲学会常任委員をなされた。

〔その著作〕

（論文）

- (1) 『聖アウグスティヌスにおける至福生活の概念とその認識論的基礎』, 竜谷大学論叢, 298・299号, 1931。(2) 『プラトーンにおける認識への道』, 哲学研究, 230・231・232号, 1935。(3) 『エレア派のゾエーノンの哲学』, 哲学及宗教と其の歴史(波多野精一先生献呈論文集所収), 岩波書店, 1938。(4) 『二種のテエテーツス』, 哲学研究, 270号, 1938。(5) 『神と真理——アウグスティヌスにおける所謂神の存在の論証について』, 宗教研究, 105号, 1940。(6) 『論理の超越と超越の論理』, 宗教研究, 106号, 1940。(7) 『プラトーン哲学と科学性の問題』, 科学知識21の1, 科学知識普及会, 1941。(8) 『文芸復興』, 河合栄次郎編〈学生と西洋〉所収, 日本評論社, 1941。(9) 『歴史の宗教性について』, 宗教研究, 1943。(10) 『歴史的時間と宗教的時間』, 日本諸学研究報告, 第19篇, 文部省, 1943。(11) 『ティトウス・ルクレーティウス・カールス』, 日伊文化研究, 日伊協会, 1944。(12) 『确实性——聖アウグスティヌス研究, そのI——』, 哲学研究, 353・356号, 1946。(13) 『ギリシアのポリスとその社会倫理性』, 哲学, 1の4, 思索社, 1947。(14) 『知性の優位と信仰の優位——聖アウグスティヌスにおける——』, 哲学季刊, 第7号, 1948。(15) 『神は何故に人間となり給ひしか——聖アンセルムス——』, 玄想, 206号, 1948。(16) 『科学の倫理(下村氏との往復

書簡』, 自由文化, 第13集, 1948。(17)『哲学の立場について』, 哲学雑誌, 第63卷, 701号, 1948。(18)『PHILOSOPHIAについて』, 哲学評論, Ⅲの9, 民友社, 1948。(19)『聖アウグスティヌスにおける哲学の概念』, 西洋古典論集, 創元社, 1949。(20)『西田先生と聖アウグスティヌス』, 知と行, 大東出版社, 1949。(21)『聖アンセルムスとプロソロギオン』, キリスト教文化, 43号, 1950。(22)『プラトーン』, 哲学講座, Ⅲ所収, 筑摩書房, 1950。(23)『歴史的時間について』, 哲学年報, 第10輯, 1950。(24)『徳』, 新倫理学講座, Ⅱ所収, 創文社, 1952。(25)『プラトーンの国家について』, 新倫理学講座, Ⅲ所収, 創文社, 1952。(26)『懐疑の克服——アウグスティヌス研究序説——』, 哲学研究, 419号, 1953。(27)『内的人間と外的人間——聖アウグスティヌスの人間論』, 哲学年報, 第14輯, 1953。(28)『発展と縁起』, 哲学年報, 第15輯, 1954。(29)『ペラギウスについて』, 文哲学年報, 第16, 17輯, 1954, 1955。(30)『アガペーとエロース』, 理想, 290号, 1957。(31)『アウグスティヌスにおける精神の構造を表わす二, 三の用語について』, 西洋古典学研究, Ⅵ, 1958。(32)『アウグスティヌスについて』, 信濃教育, 895号, 1961。(33)『プロテーノスについて』, 同誌, 912, 913号, 1962。(34)『アウグスティヌスの哲学とヒューマニズム』, 中世思想研究, Ⅴ, 1962。(35)『アウグスティヌスにおける神の創造について』, 哲学研究年報, 第10号, 1969。

(著書)

『プラトーン』, 西哲叢書, 弘文堂, 1936。『古典と反省』, 全国書房, 1947。『アウグスティヌス哲学の研究』, 創文社, 1960。

著書『プラトーン』では, その哲学を前期と後期に分から(『古典と反省』, 38頁も参照), 前期では, ソクラテースから出発して徐々に展開した問題を, 大体その発展の過程を辿って述べ, 後期では, 専ら対話篇をその成立の年

代順にしたがって分析しながら叙述なさっている。本書ではプラトーンの問題であった数学論は割愛されているが、『アカデーメアと数学の問題』という題名の下に発表するお考えはあったようである。数学論は、無仮定原理たる善の形相の認識に達する準備であり、弁証法のプロパイデアと先生は考えておられる。論文の(4)では、田中美知太郎訳と田中晃訳との翻訳の比較批判がなされている。

『古典と反省』には、上記の論文の(6), (7), (8), (9), (10), (11)が含まれ、(8)は『西洋文化への省察』(現代教養文庫, 世界思想研究会, 1952刊)の中に、原随園, 恒藤恭, 石原謙などの諸先生の論文とともに所収されている。論文の(6), (9), (10)は宗教哲学ないし歴史哲学の問題が示されている。(9), (10)に⑦を加わえて、そこでは、人間存在が歴史的存在であり、人間という歴史的主体の存在の具体的・現実的な在り方が歴史的時間であり、歴史的時間は行為的時間であり、自然的時間は歴史的時間の契機としてその中に含まれる。歴史的時間は連続にして非連続, 内在的にして超越的という性格をもち、そこに宗教的時間の媒介性がある。さらに歴史の世界はそのまま宗教の世界だと示し、歴史を神の啓示, 神の救済史であるとする。(6)では、宗教のもつ論理は、超越の論理で、親鸞の「念仏には無義をもて義とす」とか「他力には義なきを義とす」という風な論理を否定即肯定することが論理の超越であり、そういう論理が超越の論理である。そのような超越の論理については、著書『アウグスティヌスの研究』の中核である「愛によって働く信仰」、または、『起信論』の「因言遺言」、「離言真如」と「依言真如」、さらに、『法界縁起論』の「事々無礙(碍)」となって展開されているが、この点は論文の⑧で一層詳しく論ぜられている。なお、宗教の問題では、(11)で、ルクレーティウスの“De rerum natura”の宗教の問題を取扱っている。

(30)では、ニーグレンが批判されている。アウグスティヌスにおいては、ニーグレンによって示された、下降と上昇という対立せしめられるような

図式的な類型上の *caritas* (ἀγάπη) と *amor* (ἔρως) との対立を認めることができないとし、ニーグレンのその誤りは、まず、プラトーンの *μετέχειν* (分有する) と *κατέχειν* (分取する) との区別を知らず、しかして、エロースは単に上昇運動のみならず下降運動をも含み、また、アガペーも単に下降運動のみならず上昇運動をも含んでいることを知らないところにある。アウグスティヌス自身も、*caritas* と *amor*、それに *dilectio* を加わえて、それらを意識的に同義語としている。実はそこにアウグスティヌスの深い意味がある。すなわち、アガペーとエロースは簡単に下降と上昇との対立ではなく、*caritas* はヘブライズム (宗教) と連り、*amor* はヘレニズム (形而上学) に連る愛であって、両者の対立は両イズムを背景とするところにあり、アウグスティヌスは両イズムの結合の先端にあって、プラトーンのエロースの本質をあくまで究わめて行くことによって *caritas* に達し、神を愛することがただちに神に愛せられることに外ならず、アガペー (*caritas*) とエロース (*amor*) とはアウグスティヌスでは一つであったと、ニーグレンを批判なさっている。このことは、1961年の第10回の中世哲学大会での公開講演が草稿になっている論文の(34)でも触れられている。この論文では、さらに、中世が反ヒューマニズムであったわけではなく、中世の底流にも脈々としてヒューマニズムが流れていることを示し、アウグスティヌスの *caritas* を中心とする愛こそ、あらゆるヒューマニズムの根底基礎であり、真の平和の土台であると、述べておられる。

著書『アウグスティヌス哲学の研究』には、上記の論文の(1), (5), (12), (14), (19), (26), (27), (29), (31)が含まれている。本著書は、先生が、九州大学の定年退官を機会に、その多年に亘るアウグスティヌス研究を一書にまとめられたものである。その中心問題は「知性と信仰の問題」である。これは或る意味でアウグスティヌスの聖書解釈でもある。というのは、先生は、アウグスティヌス哲学をうながす原動力が、アウグスティヌスの聖書の研究であるとし、したがって、聖書解釈学 (Hermeneutik) の重要

なことを強調なさっているからである。本著書では、知性の優位と信仰の優位を綿密に分析研究した後、信仰と知性の相互否定的媒介、循環性の重要性を指摘し、知性と信仰の対立は弁証法的に統一され、究極には、『ガラテア書』(V, 6)の「愛によって働く信仰」で止揚され、ギリシア以来の伝統的な哲学の概念が充実高揚されている。その場合、論文の(1)と(26)はこの中心問題の問題発展の出発点とされ、(27)のアウグスティヌスの人間論や(28)のペラギウス論争はその裏付けとして展開されたものである。本著書中の『補遺』〈論文の(31)〉は、アウグスティヌスの精神構造を示す多義な用語が辞書的に明確に示されているので、アウグスティヌス研究にはきわめて便利なものである。嘗って、先生御自身から、「本著書における『知性と信仰の問題』のアウグスティヌス解釈が浄土教・他力的であると云った人がある」ということを、筆者は聞いたことがある。本著書の中に、「『他力』というわれわれは浄土教の信仰に限られたもののように考え易いが、おおそ信仰は本質的に他力でなくてはならない」(235頁、なお、本願寺新報、1971、第1706号を参照)ということが示されてはいる。けれど、服部英次郎先生は、本著書について、「これは『宗教哲学的思索の粹』である」との讃辞を呈し、「アウグスティヌスの研究には一層深い意味が考えられ、初めての読者には本書の中に信頼すべき導師を見出すにちがいない」と述べられているし(『週間読書人』1960年4月18日)、また、泉治典氏は、「中世哲学のみでなく、ひろく哲学の研究に携わる者にとって必読の書である」と述べている(『中世思想研究』Ⅳ、166頁、1961)。

九州大学の退官・最終講義(サヨナラ講義)は、上述の、アウグスティヌス哲学における「知性と信仰の問題」の「愛によって働く信仰」が中心となっていたようである。アウグスティヌスの数多の著作の中でも、先生が最も愛着を感じていたものは、“Soliloquia”と『告白』であったようである。けれど、『アウグスティヌス哲学の研究』で、取り扱おうことができず、かねがね関心を寄せている問題点は、永遠性、創造、時間な

どで、殊に、恩寵論はいく度か論述を企てられているようだったが、恩寵論を学ぶ準備として展開したものがペラギウス論争の論文でもあったし、1967年の第16回中世哲学会の大会の公開講演の草稿に基づく(5)の論文が「創造」の問題であった。

〔その翻訳〕

- (1) ギルソン『アウグスティヌスの形而上学の将来』、哲学研究、191・194号、1932。(2) ソルムゼン『数学的方法の構成に及ぼせるプラトンの影響』、同誌、236号、1935。(3) オットー・トエプリッツ『プラトーンに於ける数学と形相論の関係』、同誌、254・259号、1937。(4) エドゥアルド・サンデ『大正年間遣欧使節見聞対話録』(泉井、三谷、角南らと共訳)、東洋文庫叢刊、第6、1942。(5) 聖アンセルムス『プロスロギオン』(訳と註釈)、岩波文庫、1942。(6) プラトーン『パルメニデース』(訳と註釈)、弘文堂、1944。(7) 聖ア『モノロギオン』(訳と註釈)、岩波文庫、1946。(8) 聖アンセルムス『クール・デウス・ホモ』(訳と註釈)、同文庫、1948。(9) キケロ『ラエリウス』(友情について)、『ラエリウス・大カトー』所収、生ンセルムス活社、1943、：世界大思想全集所収(生活社の改訂)、河出書房新社、1959。(10) プラトーン『国家』、I (訳と註釈)、1949、II (訳と註釈)、1952、弘文堂、：I (訳と註釈)、1970、II (訳と註釈)、1971、東海大学出版会(弘文堂版の改訂と増訂)。

※〔辞典類〕

古典哲学研究——古代——、現代哲学エンサイクロペディア所収、民友社、1949。

その他、世界大百科事典、世界歴史事典、世界名著大事典(平凡社刊)にプラトーン、プルータルコス、キケロ、セネカ、アンセルムス等々に関する項目を執筆。

翻訳の(4)は、浜田耕作先生から田中秀央先生への依頼で、長沢先生の外

三人の方々ともになされたものとのことである。(5)の訳書の付録の「その哲学」の項は、ジルソンの『中世の哲学』(É Gilson, *La philosophie au moyen age de Scot Érigène à G. d' Occam*, Paris, 1930)の一節を翻訳したものである。本訳書(5)の刊行について、先生は、(7)の「解説」(275頁)で、喜んでおられる、すなわち、この訳書が先生の予想も期待もしなかったほどの歓迎を受け、就中、戦争の前線にあってこれを繙かれた読者があり、その方から二三の書信をもらったことは、戦乱の時にあってもこの仕事が無意義でなかったと(1943年9月)。(6)は先生が学窓を出てから間もなく着手したようであるが、第33回忌(1943)の亡き御尊父への献呈の辞がある。本訳書の「解説」は、パルメニデースとゼーノーンの根本的立場を説明し、この対話の問題と内容を分析し、概観的に展開しているので、プラトーンと同篇を全般的に理解することができる。(7)は、(5)の姉妹篇であるが、1932年の秋に翻訳した。本訳書のおおの注では、本書の性格上、アウグスティヌスとアンセルムスの関係が示されている。(8)は、上述の二篇とともに、アンセルムスの三部作といってもよいが、これらの三部作を貫くものは理性(ratio)——信仰の知性(intellectus fidei)——であろう。先生は、本訳書(8)の「解説」の末で、「1946年の今、すでに武器は捨てられ平和が来たが、武力戦の終熄は必ずしも人間のこころの平和の到来を意味するものではない。戦争に続く数々の不安と動揺、饑餓と窮乏などの困苦に悩む同胞に何ものをも寄与することのできない訳者はせめてこのささやかな書物が、さういふ人々に、こころの糧ともなり、慰めともなって、明日の生活に希望をもたらすことを祈念してやまない」との意味のことを述べられている。(9)は、田中秀央先生の徳憑により、また、ラテン語に習熟するために訳されたものようである(1930—31頃)。本訳書は、翻訳の上では、新版は、旧版に改訳がなされている部分があるが、註釈の上では、旧版よりも短縮されている。(10)のプラトーン『国家』の翻訳と註釈及び解説であるが、旧版では、Ⅰは原文の第1、2巻、Ⅱは第3、4巻で、出版

社の倒産のため中断しているが、新版は、東海大学古典叢書の一つで、Ⅰは原文の第1～4巻、Ⅱは第5～8巻で、ここまでの訳文と註釈の刊行で先生が御逝去なされたのである。その第Ⅲ巻は、原文の第9、10巻の訳文と註釈及び解説になる。これについては、高田三郎先生と岡田正三先生、さらには、沢瀉久敬先生、宮本正清先生のお心遣いもあってのことと思われるが、岡田正三先生がこの遺業を引き継がれ、すでにでき上がっている訳文と註釈のゲラの校正や、解説を残されたノートなどによって完成し、その末端の仕事を清水正照氏と筆者が御手伝い申上げることになった。今年度中には刊行の運びに至ることを念じて止まないものである。本訳書は、原文と邦訳の対訳になっているが、このギリシア語の原文は、J.Burnet校訂のプラトーン全集中のものを写真版として借用されているが、長沢先生としては、先生の読み方にしたがって新しく組版するつもりであったが、本邦の印刷では不可能なので已むを得ず断念なされたのである。このことは本訳書の序文にもあるが、葬儀の弔辞で、岡田正三先生が、この「長沢版」ともいふべき原文の校訂が組版されないことを、遺憾の念をこめて表明なされた。

長沢先生の肉体は滅びても、その数々の業績は後々までに残って行くであろう。それについて、通俗的だが、人口に膾炙される意味で、次のことばを転用し引用する、

ὁ βίος βραχύς, ἡ δὲ τέχνη μακρή.

(1973, 5, 2.)